

その意味において、本書は「現代の古典」として、読み継がれるべきものである。

(末近 浩太 立命館大学国際関係学部教授)

---

奈良雅史『現代中国の〈イスラーム運動〉——生きにくさを生きる回族の民族誌』風響社 2016年 338頁

現代中国の雲南省、省都昆明市、とあるモスクにて、政府に公認されていないインフォーマルなイスラーム教育に、取り締まり覚悟で参加しながら、礼拝は行わない——少数民族・回族による、そんなアンビバレントなイスラーム実践の印象的な一齣から始まる本書。その問題とするところは大きく二つある。

第一に、イスラーム復興現象をめぐる従来の議論では、「聖典主義的なイスラーム」の言説に言うところの「イスラーム的」な意識や行動が人びとのあいだに顕在化・活発化する様子に、もっぱら焦点が当てられてきた。しかし、そのような意味での「イスラーム的」と「非イスラーム的」の区分を前提として、その「イスラーム的」なもののみ注視するだけでは、世俗主義の近代国家におけるムスリムの宗教覚醒のあり方を把握するのに不十分である。「イスラーム復興に位置づけられてきた諸運動」を、「教義としてのイスラームと矛盾する非イスラーム的なものをも含み込む人びとの実践のあり方から捉える必要がある」。あるいは「宗教と世俗を区分せずにイスラームに関わる諸運動を捉える必要がある」。

第二に、中国の宗教復興に関する先行研究では、国家の公認ないし禁止の対象として制度化された「宗教」領域を、議論の前提としてきた嫌いがある。結果、自律性を求める宗教集団が当該領域をめぐる国家とせめぎ合う様相如何に関心が集中してきた。しかし、むしろ制度上の「宗教」に還元されず国家管理の対象にならないような実践によって、人びとが自律的な宗教活動を可能にする事例も存在する。そのような、「派手なポリティクス」を引き起こさない宗教実践にも着目すべきである。

以上のような問題意識のもと、本書は、昆明市を主な舞台として、「教義としてのイスラーム」や「国家の制度上の宗教」に回収されない、現代回族のイスラーム実践を記述する。当該実践は、イスラームと関係しつつも、「非イスラーム的」要素を巻き込む、あるいは「非宗教的」領域でなされる。社会のイスラーム化を目指す「イスラーム的社會運動」とも、個人の敬虔化を志向する「敬虔運動」とも異なり、「イスラーム運動」としか呼びようがない。そのような実践を、本書は、現在進行中である回族の宗教的覚醒・自律化の実態として提示する。

「序章」にてこのように趣旨を説明したのち、本書は四章と終章を置く。

第一章「ムスリムから「回族」へ」では、来華した外国人ムスリムが中国のムスリムとなり、さらに中華人民共和国の少数民族・回族となるまでの歴史的過程を概説したのち、回族のイスラーム運動の背景として、現在の回族社会の分裂状況に説き及ぶ。すなわち、イスラーム復興の進展と回族社会の漢化によって、「敬虔なムスリム」を自認する人々と、彼らから「漢化した回族」と批判される人々、という分断が生まれているという。

第二章「イスラーム復興と漢化のあいだ」では、回族のイスラーム運動が、部分的に利害を共有する多様なアクターの共同で推進されることで、「教義としてのイスラーム」に収斂せずに展開される様子が、二つの事例から描かれる。

第一に、貧困地域の普通教育支援という政府主導のプロジェクト「支教」の名義のもとで行われる、回族大学生の活動が取り上げられる。当該「支教」活動は、多様な参加者によって、ダアワ運動(宣教活動)でありながら、民族発展を目指す普通教育振興でもあり、参加者の娯楽・観光活動でもあるというように、「非イスラーム的」要素を巻き込みながら、多義的に展開されるという。第二に、チャット・グループ「昆明回族QQ群」の事例が紹介される。「敬虔なムスリム」を自認する回族が、「漢化した回族」の集まりと批判しつつも、就職活動や結婚活動の一環として参加した。それによって「昆明回族QQ群」は、一旦「教義としてのイスラーム」の色合いを帯びた活動へと向かった。しかしその活動は、既存の宗教組織との競合や国家の「宗教」管理への抵触によって挫折し、当該グループ構成員の多くが娯楽・異性間交流を重視することもあつ

て、やがて沙汰やみとなった。

第三章「宗教」に抗するイスラーム」では、「回族の自律性」が「国家とのポリティクスを巧みにかわし続ける不断の動きのなかで、常に不安定さを含みながら立ち現れてくる」という点が、やはり二つの事例から論じられる。

第一に、他地域のムスリムとの交流や学習などを目的とした「ジャマアト訪問(出哲瑪提)」の事例が持ち出される。政府の宗教管理が厳格な昆明市では困難な種類の宗教活動も、取り締まりの比較的緩い沙甸のような地方に場を移すことで実現されているという。第二に、公式のアホン(モスクでの宗教教育担当者)資格をもたない、マ・タオという人物が、インフォーマルなイスラーム教育を何とか継続していく上で、アホン資格をもつ協力者を確保したり、非「宗教」的活動を隠れ蓑にしたり、活動を一時中断したりして、取り締まりを回避していた、という事例が語られる。国家に抵抗したり政府と交渉したりせずに、自律性を確保しようとする回族の戦略が見えてくる。

第四章「揺れ動く宗教性」では、まず、「敬虔なムスリム」を自認するある回族の人と、いわゆる「漢化した回族」に相当するある人が、それぞれ中国社会でイスラームを実践する困難に直面した際にどう対処したかが示される。「敬虔なムスリム」は、漢族のように振る舞うことを要請された際、そこに「イスラーム的に積極的な意味を与えよう」と工夫するいっぽう、中国でイスラームの「原則」に従うことの限界を感じ出国を選択肢として考えていた。「漢化した回族」は、実践よりも信心を重視し、イスラームの「原則」に従えない現状を「移行」期間としつつ、様々な社会的つながりの中で、社会的現実と折り合いをつけながら、イスラームを実践していた。

また、このように対照的な「敬虔なムスリム」と「漢化した回族」の分化が、回族社会を分断するいっぽうで、「敬虔なムスリム」の出現が、回族と漢族の境界に揺らぎをもたらしているとの指摘がなされる。回族にはもともと族内婚への選好があったが、「敬虔なムスリム」は非ムスリムを宣教の対象ないし潜在的ムスリムと捉え、非回族・改宗者との結婚を容認する傾向にあるという。

終章では、回族のイスラーム運動は、「中国のムスリム」としていかに生きていくか、社会集団としての回族をいかに再生産していくかに関わるため、完全に反イスラーム的な活動にもならなければ、教義としてのイスラームの側面が極端に強い活動にもならない、と結論づけられる。加えて、回族の再生産という点に関しては、「誰が回族か」は固定的でないとされる。そして、回族性よりもムスリム性を重視する「敬虔なムスリム」のイスラーム運動が、回族と漢族の境界を開かれたものに変えていくだろう、との予見でもって締めくくられる。

さて、以下に評者の感想をいくらか述べたい。

中国ムスリムに関する研究においては、彼らが中国社会の非イスラーム的な環境の中で、イスラームをいかに信仰・実践してきたかということが、主要な問題の一つとして議論されてきた。本書は、現代中国の回族に焦点をあてて、その問題にひとつの回答を与えた、と評価することも可能である。すなわち本書が、「支教」やマ・タオの事例によって、国家とのポリティクスを回避すべく制度上の「宗教」の枠外でイスラーム運動を繰り広げるといふ、現代回族の人々の機略を浮き彫りにしたことは、極めて意義深い。それは、現代回族によるイスラーム実践の特徴的なあり方を明らかにしたのみならず、前近代中国ムスリムのそれに関する考察にとっても刺激的である。

現代中国国家の「宗教」統制では、問題となる「宗教」の範疇を厳密に設定するため、制度の外側ないし「世俗」の領域に、宗教実践の自律性の余地が生まれる。たとえば、マ・タオは、アラビア語学教育や恋愛講座の名義でイスラーム教育を行った(208-210頁、216-217頁)が、それは非「宗教」教育の看板を掲げて「宗教」管理の対象となる危険性を少なくするためであった。いわゆる「上に政策あれば下に対策あり」である。いっぽう前近代の中華王朝のもとでは、制度的に「宗教」の範疇ないし聖俗区分を設けないので、この種の方は見出されないだろう。ゆえに非「宗教」的活動を通じてイスラーム実践を実現するというのは、現代回族ならではのやり方として注目されるのである。また、現代中国の「宗教」統制が、ある意味きめ細やかな分、隙を生んでいるというのも面白い。

ところで、前近代中国ムスリムも、国家との軋轢から逃れるために、イスラームを中国国家・社会が容認する伝統思想、とりわけ儒教と調和させることに努力していたことは、従来から論じられてきた。なるほど

前近代の中華王朝のもとで、イスラームにある種の抑制が利いていたことは、否定できないだろう。しかしその抑制は、現代国家に特有の「宗教」管理のようなものでなかったとして、どのようなものであったと理解すべきか。また、その抑制をかわす上で、前近代中国ムスリムは、イスラームと中国伝統思想の調和以外に、何か別の方法を探り得なかったのだろうか。奈良氏の如上の議論は、この種の問題にあらためて向き合う糸口を提供しているように思われる。

また、本書の四章や結論における、「回族」概念、回族・漢族関係の変遷に関する議論も、大変興味深い。すなわち、かつて回族は「回族＝ムスリム」との観念のもと族内婚を愛好し漢族との境界を比較的強固に保っていた。しかし「漢化した回族」と「敬虔なムスリム」が分化する現在、後者を自認する回族は漢族を潜在的ムスリムと見なし、両者の境界は曖昧になったという。「外国人ムスリム」から「中国のムスリム」、そして「回族」への転換という歴史のプロセスを継いで、回族は今なお新たな政治的・社会的状況に即した自己改造を不断に行い続けているとの指摘には、はっとさせられる。

ただし、「回族＝ムスリム」の観念（「回族」であれば無条件に「ムスリム」であるとする観念）や族内婚選好を示すものとして挙げられている事例については、検討の余地があるかもしれない。まず、「回族＝ムスリム」観念の抽出は、奈良氏が、回族の人々からしばしば「お前は回族か漢族か」「日本に回族がいるか」と問われたことや、あるモスクで「ここは回族の場所だ」と言われた経験にもとづいている（76頁）。しかし、これらの事例では、「回族」の語が、単にムスリムを意味する言葉として用いられていた可能性も考えられる。とすれば、必ずしもその言葉づかいが「回族＝ムスリム」観念の存在を証明するわけではないように思われる。

また、回族の族内婚選好に関しては、回族のリン・バオという人物が、息子と漢族女性ナ・チンの結婚に反対したという事例（262-263頁）が紹介されている。ナ・チンがイスラームに改宗したにもかかわらず、回族でないことで結婚に反対したというのである。だが、リン・バオは、むしろナ・チンの親族が非ムスリムのままでいることを問題視していた可能性も考えられる。奈良氏自身、回族が漢族女性との結婚を躊躇する理由として、親族の改宗問題を挙げている（134-135頁）からである。

最後に若干の疑問を呈したが、本書は全体として、丹念なフィールドワークの確かな成果である豊富な事例にもとづき、堅実な議論を行っている。加えて、世俗国家・中国に生きるムスリム・マイノリティの「イスラーム復興」の実態という非常に大きなテーマを扱っており、議論は示唆に富んでいる。中国ムスリム研究者にとってのみならず、「イスラーム復興」に関心のある読者にとっても、玩味すべき一冊といえるだろう。

(中西 竜也 京都大学人文科学研究所准教授)

---

須永恵美子『現代パキスタンの形成と変容——イスラーム復興とウルドゥー語文化』ナカニシヤ出版 2014年 iii+215頁

### 本書の概要

本書は序章および1～7章で構成されており、1～3章が第一部「パキスタンの成立」、4、5章が第二部「出版とイスラーム復興」、6、7章が第三部「マウドゥーディーの思想と著作」となっている。表題やこういった構成を一瞥して想像がつくように、本書はパキスタンという国の性格を、イスラーム（復興）と強く結びついたウルドゥー語出版活動の発展を通じて考察しようとする試みであり、イスラームと結びついたウルドゥー語出版活動の代表例としてマウドゥーディーのタフスィールが検討されている。以下、本書の概要を章ごとに見て行きたい。

序章「現代パキスタンとイスラーム」では簡単に本書の主題、目的、問題意識、対象、方法論、構成が概観される。

1章「パキスタン研究のための方法論的諸問題」では、主にパキスタンの憲法を手掛かりに、パキスタンという国の概要が説明される。とくにパキスタンの各州（およびムハーシルやカシミールといった特殊な集団・地域）の特徴と各州内の言語的多様性について丁寧な説明が施されている（なお「Kashmīr」について、